

日本線維筋痛症学会 第6回学術集会は2014年9月13日、14日JA長野県ビルにて開催された。今回の最大のトピックスは外国人研究者の特別招聘講演とそのシンポジウムであった。特別企画として、HPVワクチン関連神経免疫異常症候群（HANS：ハンス症候群）について、イスラエル Tel-Aviv University の Shoenfeld Yahuda 教授をお迎えして、特別講演とシンポジウムが開催された。

今回のプログラムでは特別講演として、疼痛治療センターを主宰されている牛田享宏教授に集学的な内容をご講演いただいた。また、教育講演1では、関節リウマチ診療では指導的立場で活躍されている、後藤眞先生に老化と疼痛のかかわりについて、教育講演2では本邦における線維筋痛症の創世記の頃から指導的な役割を果たされている松本美富士先生に線維筋痛症ガイドラインの現状をお話しいただいた。

ランチョン・イブニングセミナーでは線維筋痛症治療に関する様々な取り組みについて、精神科専門医の立場から長田賢一理事、リウマチ専門医の立場から岡寛理事、オピオイド治療の陰の部分については三木健司理事、痛みと情動については住谷昌彦准教授、ペインニクスの立場から伊達久先生、心身医学と精神疾患については村上正人理事の講演がなされた。シンポジウムでは村上先生の心身医学的な取り組み、植田弘師教授を座長として、創薬の取り組み、そして、班目健夫先生の主導で非薬物療法・東洋医学に関する取り組みについて、それぞれ口演発表と活発な討論がなされた。また、一般演題・ポスター発表でも各種の取り組みが発表された。

私は1982年に初めて線維筋痛症の患者を経験し、それから32年を経過した。最近、線維筋痛症の病名がようやく一般の人々にも知られ始めたが、未だにこの疾患を敬遠する医療関係者も少なからず存在する。リウマチ性疾患の初期には線維筋痛症の症状を呈することが多く、1980年代には疼痛部位の筋線維には有意な病理所見がないことから、病因・病態に関する報告は中枢神経系におけるものがほとんどであり、通常のX線などの画像検査では確認できない機能的疼痛と言われてきたが、近年、技術革新により、線維筋痛症と初期診断された症例においても、超音波あるいはMRIにより、四肢、脊椎、仙腸関節など腱・靭帯の付着部炎が確認されている。最近、脊椎関節炎あるいは乾癬性関節炎と線維筋痛症を比較した研究が多い。今回の展示会場でも超音波検査のライブ実演が行われ、だいいちリハビリテーション病院の西森技師が担当した。

続いて開催された市民公開講座では症状が改善した2名の患者の発表があった。長年線維筋痛症を患っている症例では脊椎関節炎が基盤にあることが多い。線維筋痛症の診断だけではなく、基本の器質的疾患が存在することに注意せねばならない。

冒頭にも述べたが、HANS：ハンス症候群については西岡理事長による基調講演があり、中枢神経系の役割の重要性が述べられた。Shoenfeld Yahuda 教授の講演は通訳もつき、わかりやすい講演であった。翌日開催された HANS 症候群のシンポジウムでは遅延型副反応について西岡久寿樹理事長、神経炎症の視点から横田俊平理事、分類予備基準については松本美富士副理事長、高次脳機能障害については東京慈恵会医科大学の平井利明先生、そして、副反応と自律神経障害については信州大学第三内科池田修一教授から講演があり、討論もかわされた。